東京都三多摩公立博物館協議会報

ミュージアム 多摩

No.17
発行
1996年2月1日

▲くにたち郷土文化館企画展『苦難の日々も一国立の戦中・戦後をふりかえる一』

特集・終戦50年と博物館事業

平成７年は太平洋戦争終結から50年目にあたり、マスコミをはじめとして、関連した様々なイベントや出版がみられた年でした。全国各地の博物館・資料館でも、同様にこうした展示や出版が相次ぎ、このことは三博協加盟館においても例外ではありませんでした。いいかえると、ほとんど同時に、多くの館が、似通ったテーマで何らかの取組を行った年、と言えるでしょう。

そこで、今号では「終戦50年と博物館事業」を特集として編集いたしました。

終戦50年をテーマとした事業の開催にあたっては、時代的に近いだけにかえって難しさがあること、戦争を巡って多様な立場があることなどが、主催する者を苦しめたのではないでしょうか。

例えば、計画する者のほとんどが戦争体験のない世代である反面、観覧者や読者の方が情報量で勝るという場合も生じます。また資料の扱い方によっては、ともすれば「戦争賛美」の印象を与えかねません。こうした点で、担当者には少なからぬ配慮と工夫がもとめられたはずです。

一方、企画部局や公民館、図書館などと連携したイベント・展示・出版の例がみられたことも特徴的でした。従来われわれが「課題」としてきた、館相互の連携とはやや趣を異にするものでしたが、行政内の他セクションとの連携のひとつのありかたであったろうと考えます。これを機会に、新たな方向として視野に入れていくべきものといってよいでしょう。50年の節目にあたり、すべての加盟館が戦争と平和のテーマをとりあげて事業を実施したわけではありませんが、年度計画を立てる時点でこのことを考えなかった館は少ないはずです。実際に取り組んだ館の担当者がどのような点に悩み、どうそれを克服したかを、ここでまとめておくことは重要なことと考えます。また取組みの中にみられた新しい動きは、今後の活動の参考になるものといえるでしょう。

以下の特集が、各館の今後の取組みに役立てば幸いです。

終戦50年特別展「戦争と人びとのくらし」の企画

八王子市郷土資料館

1945年8月2日の未明、八王子市は168機のB29による大規模な空襲を受け、市街地の85%を焼失するとともに、死没者400人以上という戦禍にみまわれている。

本館では、この空襲の惨状を後世に伝え、平和への願いを新たにするため、過去、2回にわたる特別展を実施している。1回目は、空襲30年にあたる1975年8月1日から9月14日にかけて開催された「八王子空襲展」であり、2回目は、空襲40年にあたる1985年7月30日から9月1日まで開催された「特別展・八王子空襲」であった。

この間、八王子空襲の公式記録編さんに対する市民的な要望があって、1981年度から4カ年をかけて『八王子空襲と戦災の記録』の編さん事業が、本館の担当で実施されることになった。この事業は、1985年3月に『総説編』『資料編』『市民の記録編』という三部作の刊行をもって終了したが、空襲の記録を様々な角度から記録するには時宜を得た事業であったと思う。

それは、市街地の85%を焼失したとはいえ、市内には戦時中の市民生活に関する資料が多数残されていることを明らかにし、さらにこの機会に多数の資料が収集され、基礎的な館蔵資料が豊富になったことにも反映されている。

2回目の特別展は、この『八王子の空襲と戦災の記録』の刊行に併せて企画されたものであった。小さな展示会ではあったが、4年間の編さん成果をふまえた企画として評価されよう。

それから10年、終戦50年を迎えた今年、3回目の特別展を企画するにあたり、これまでの継続的な資料収集活動によって、豊富に蓄積された資料群を生かした、戦時下の市民生活をテーマの中心とする方針が決定された。

そして、1931年から1945年に及ぶ長い期間、戦時下生活を強いられた市民のくらしに焦点をあてて、改めて戦争を考えてみようとする具体的な企画が検討された。展示構成の中心には、日中全面戦争に突入した1937年以降、市民が総力戦に巻き込まれていく過程が再検討できることに置き、主として館蔵の回覧板資料を多用して展示表現を行うことにした。

今回の企画を通して、新しい地域史の課題を提起したつもりであるが、これを契機として、新たな検討作業が開始されることを期待したい。

「戦後50年」ブームの残したもの

くにたち郷土文化館

当館では、「苦難の日々も－国立の戦中・戦後をふりかえる」と題した企画展を、8月15日～10月22日までおこなった。“戦後50年展花ざかり”と揶揄されるような状況の中で開催する必要があるのかといった懐疑的な声も多かった。しかし、他の自治体がどうであれ、公共の施設である博物館として、この区切りの年に自分たちの住んでいるまちが戦争とどのようにかかわっていたのかを、市民に対して伝える義務があると考え、あえて実施することとした。

当館は開館して間もないため、収蔵資料も決して充実しているとはいえず、とりわけ戦争関係の資料は非常に乏しい状況にあった。そのため、聞き取り調査とともにまず資料探しから始めなければならず、広報誌などで市内の人々に資料借用をよびかけた。その結果、多くの市民から申し出があり、展示資料の半数以上はこうして集まってきた市民からの資料であった。

企画をたてるにあたって特に留意したことは、第一に〈庶民のくらし〉という視点を貫いて、ありのままの生活のようすをありのままに伝えること、そして第二に、戦中と戦後を断絶せずにそのつながりを見ていくことであった。

1945年8月15日の時点で生活のすべてが一変したのではなく、一日一日を生きている庶民にとっては、新しい時代へのとまどいを感じながらも、連続性の中にあったはずである。戦中と戦後を切り離している展覧会が目についたが、あえてそのつながりを強調し、現在のわれわれの生活へ引きつけて考えられる視点を呈示することに努めた。とくに国立の場合は、戦争の傷跡が浄化運動・文教地区指定運動へと発展していったことから、現在の生活にも多大な影響を及ぼしている文教地区の位置を、戦争との関連でとらえるというアプローチは有効であったと思われる。ただそうは言っても、結果がどうであったかと聞かれるとやはり甚だ心許ない。

お祭り騒ぎの感すらあった「戦後50年」は過ぎた。「戦後51年」以降、どれだけ地道で着実な調査を進め、散逸しつつある資料を収集し、展示や教育事業に結びつけていくことができるか、博物館としての真価が問われるのはこれからであろう。その意味で、今回の企画展は、今後の継続的な調査・研究の開始を告げるものだったのかもしれない。

平和展の開催について

調布市郷土博物館

調布市郷土博物館では、平成２年から、公民館と共催で、公民館を会場とする移動展という形で、平和祈念事業としての展示を毎年開催しています。

博物館は主として展示を行ない、公民館は映画会や見学会などの関連事業を行ないます。展示では、博物館が収蔵する資料のほかに、市民にも資料の提供を呼びかけます。公民館では、市民の戦争体験記を募集し、『いま伝えたい私の戦争体験』という冊子を毎年発行してきました。今年はそれをまとめる形で、『いま伝えたい私の戦争体験　総集編　1991～1995』を発行しました。５年間にわたる寄稿者は、延65人に達し、その戦争体験は戦後半世紀が過ぎた今も当時の様子を具体的に物語り、戦争の悲惨さや平和の尊さを知るうえで、生きた教科書の役割を果たし得るものです。

博物館では、この移動展をきっかけに、資料の寄贈を受けたり、戦争体験の聞き書きを行ったり、資料の収集をすすめてきました。

これまでに行ってきた展示と関連事業は、以下のとおりです。

＜平成２年度＞
・「平成展－庶民の暮らしを中心に－」
・平成フォーラム「市民が語り、市民が創る平和」
＜平成３年度＞
・「太平洋戦争と庶民のくらし」展
・「すいとんを食べて映画（きけわだつみの声・ひめゆりの塔）を見る会」
＜平成４年度＞
・「昭和の戦争展」
・映画会「ガラスのうさぎ」「となりのトトロ」
＜平成５年度＞
・「太平洋戦争と庶民の暮らし」展
＜平成６年度＞
・「平和の礎展」
＜平成７年度＞
・「今も残る戦跡展」
・松代大本営跡を訪ねる旅
・戦争体験を語り伝えるつどい

この事業は、公民館との共催で実施しているため、博物館独自で実施する展示とは違った展開がみられ、戦後50年の節目のときだけでなく、今後も継続していきたいと思います。

戦後50年平和事業『戦争資料展』の開催

日野市ふるさと博物館

当館では、終戦50年にあたる本年、戦争体験を風化させず、次世代に語り継いでいくため、平成７年４月から平成８年４月まで全７回の『戦争資料展』を開催している。これまで「戦時下の暮らし」「出征兵士の戦争体験」「焼け跡からの出発」「教科書からみた時代～戦中・戦後の教育の変遷～」などのテーマで展示を行ったほか、それらの中心的な行事として７・８月に臨時の展示室で「戦争資料展」を開催し、併せて「戦争体験を語り継ぐ会」と「戦争の痕跡を巡る」といった行事を行い親子で戦争について考える機会を持った。

戦争関連資料については、展示を前提に、前年度より『博物館ニュース』、チラシ、日野市広報等を用いて市民に提供を呼び掛け、提供者の意向に沿って「寄贈」「寄託」「貸与」の別で収集し、併せて聞き取り調査を行った。

展示にあたっては、資料提供者の心情を尊重して、資料に館独自の解釈を加えることはせず、聞き取り調査によって得たエピソードをもとに、ありのままの展示をするよう心がけた。キャプションなどに使用する用語についても、様々な思想や体験を持った人が観覧することを考慮して、慎重を心がけた。

本事業ではほぼ２ヶ月毎に展示替えが行なわれるため、今までにない慌ただしさの一年となった。しかし学童疎開や日野での空襲、戦時中の日記など、本事業のために調査・収集がなされた資料も多数あり、当館の資料の蓄積という面でも大きな意味があった。また資料の収集活動を通じて知り合えた方々は博物館にとっての人的な財産であり、そうした方々との共同作業によって博物館の存在が市民にとってより身近なものにすることができたと考えている。

空襲被害地図の共同制作と巡回展示

立川市歴史民俗資料館

平成６年２月28日から同５月７日まで、当館では「太平洋戦争と立川」と題する特別展を開催しました。会期をここに設定したのは、終戦50年というより、立川空襲50年（４月４日）を意識したためです。

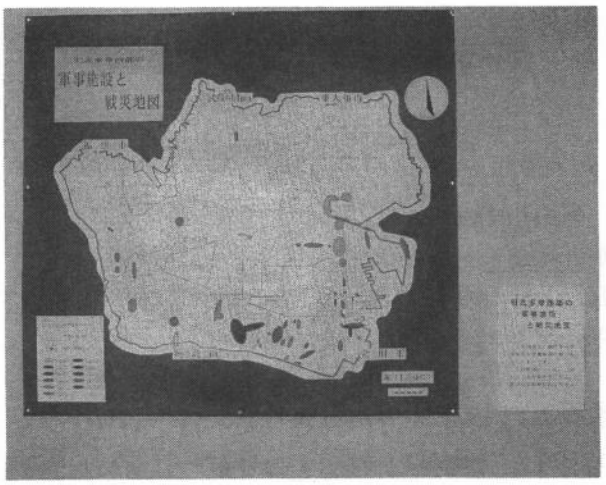
展示は、軍関係を除く人々のくらしに焦点をあて、“戦時下のくらし”“空襲”“強制疎開”などを柱に構成しました。

計画時点で考えたのは、いわゆる“軍都立川”というとき、現在の立川市の範囲でとらえるよりも、昭島市・福生市・東大和市・武蔵村山市も含めた、いわば“軍都立川圏”を考慮する必要があるのではないか、ということでした。

特に空襲のことを考えると、米軍が標的とした“Tachikawa”が、当時の立川市だけのことではなかったことは明白です。従って、上記各市の情報を集めれば、“軍都立川”の性格がより鮮明に浮かび上がるはずだ、と考えたのです。

そこで、それぞれの担当者によびかけ、５市共同による空襲被害地図を作成することにしました。たまたま各市でも、終戦50年や戦後50年に関連する展示の予定があり、できあがった地図を各市で巡回展示することにもしました。

また、この間来館者から寄せられる新情報もあるだろうと予想されたので、地図そのものは



現在判明しているものに限って作成した、ということにして、積極的に情報提供をよびかけることも確認しました。つまり、われわれが作った地図を、展示期間中を通じて来館者と一緒に作り上げていこう、というわけです。

東大和市在住の人が立川市の情報を提供することもあるだろうし、立川市在住の人が福生市の情報を提供することもあるだろうということで、巡回展示が終わった時点でそれらをお互いに交換しあい、情報をもらった市の担当者が、くれた人の住んでいる市へ調査に入ることも、相互に了解しました。

10月には、この巡回展示が終わります。

小規模ではありますが、前号の執筆テーマだった「博物館の相互連携」に、ようやく当館も取組むことができました。

まずは今回の巡回展示を総括すること、これから今後の展開が始まるものと考えています。

戦後50年の収蔵品展示

武蔵村山市立歴史民俗資料館

当館では収蔵品の中から戦時中の武蔵村山市域の様子を伝える資料を展示し、二度と戦争を繰り返さないためにあらためて戦争を見つめ、平和について考える機会とした。また、市民の戦時体験の収集も図るため、情報提供の依頼も行った。幸い、立川市の資料館の呼びかけで昭島市、東大和市、福生市とともに５市共同で各市の軍事施設と被災地図を作成することができ、来館者の関連情報提供のよいきっかけとなった。

今回の展示では当時の出版物を割合多く展示できたため、その内容からあらゆる事象が戦時体制を支えるしくみに組み込まれていった様子を見てとることができた。また、軍事施設と被災地図のほか港区赤坂国民学校の学童集団疎開報告にみる市内の空襲記事などからあらためて軍都「立川」周圏地域としての武蔵村山の位置付けを認識することにもなった。新たに、市内に数多く残る軍関係の疎開施設としての防空壕については東京都西部公園緑地事務所により野山北公園内の分布図が作成されたため、その成果を借用し、展示することができた。聞き取り調査により、これらの防空壕にはドラム缶入りの燃料などが貯蔵されていたことが判明したが、軍関係の機密事項のためか不明な点が多く、詳細な調査は今後の課題となった。

戦後50年の節目は、直接的な戦時体験の記録化の絶好の機会であり、場合によっては最後の機会であったかもしれない。戦時体験を薄れさせないよう、情報収集の継続に努めていきたい。

戦後50年事業の取り組み

東大和市立郷土博物館

東大和市が実施する「戦後50年平和事業」の一環として、「東大和と戦争」と題した資料展を8月22日から10月15日までの期間開催した。

東大和市では、30年ほど前から生活文化財を積極的に収集しており、その際に集められた戦争に関する資料を、毎年8月に市役所のロビーなどで資料展示してきた経緯がある。

今年、戦後50年という節目を迎え、改めて軍需工場に学徒を送っていた学校の調査の実施や、当時疎開をしていた学童や教師を捜すことができ、展示内容を深めることができた。

展示は「戦時下のくらし」「軍隊生活」「軍需工場の操業と被害」「疎開児童の生活」「私と太平洋戦争」「参考展示」にコーナーを分け、市民から寄贈された資料を中心に展示を行ったが、当時の世相や生活をさらに深く知ってもらうという意図から、「戦時下のくらし」では、貨幣の品質の低下と物価の高騰がわかるパネルや戦時下の週刊誌の展示、「参考展示」においては、軍票や伝単（謀略宣伝ビラ）の展示をあわせて行った。

また、立川市の発案により、立川、昭島、福生、武蔵村山、東大和の軍事施設と爆撃の被害を表した縮尺1万分の1の地図を巡回展示し、各市の横のつながりが多少なりとも持てたことは大きな成果であったと考える。

さらに、「私と太平洋戦争」では、戦後この土地に移住してきた市民が8割近くになっていることから、「それぞれの市民の戦後50年」という視点にたって、特に東大和市に因縁のない資料であっても、広く市民から借用し、展示することとした（実際には6名の方から資料を借用したにとどまった）。

加えて、この企画展に関連して、「思い出・疎開・徴用」と題した座談会を企画し、当時の疎開児童、引率教諭、工場の工員、動員学徒の方々から、それぞれの知るエピソードを語ってもらう機会を設けた。

今回の企画展は、ともすると50年という年の“イベント”としてとらえられがちである。そのテーマが多くの犠牲者を出した戦争であることや、市の歴史構成の大きな要素のひとつであること、さらに戦災建造物を文化財に指定した情勢も絡めて、今後も地道に資料の蓄積をはかり、市民に公開していきたいと考えている。

20世紀多摩の文化運動
ー戦後福生の文化運動を中心にー

福生市郷土資料室

文化運動とは、個々人が何者にも束縛されることなく自主自立的に自分自身の力でつくりだす運動で、自己表現をふくんだ自己教育運動ですが、多摩地域では1910年代から20年代の大正デモクラシー期、そして1940年代後半、戦後まもない時期に興った文化運動がしられています。

大正から昭和初期にかけての三多摩の農村は、小作争議がはじまり、また青年団活動がたかまり、そして地域文芸運動が芽生えています。特に、八王子や町田地域では文学、絵画、児童文化、郷土史研究、音楽、社会問題研究、生活改善運動など多様な地域文化が開花しています。

福生では、1940年代後半、太平洋戦争の敗戦直後から青年達による種々の活動がはじまっていますが、ちょうど今年は、戦後50年を迎えるおおきな歴史の節目にあたりますので、あらためて、福生の戦後の動きを地域に残された様々な資料を展示することによってたどってみました。

いまから50年前、敗戦によって人々は方向を見失い、また戦場から帰還した多くの若者は何をしたらよいかわからない、そんな社会状況のなかにありました。しかし、それから80日後、1945年11月3日に福生青年団が再建されています。青年達は「青年団倶楽部」に集まり、祖国再建を話し合い、これからの生き方を論じ、語り合い、この会合の記録を団報として印刷し発行しています。また、この混沌とした状況のなかで読書会、英語講習会、演劇活動、文学研究など様々な活動が生まれ、やがて一気に花開きます。なかでも福生青年団の演劇活動は盛んで、西多摩各地で行われた演劇コンクールで優勝し、演技賞をうけた団員もいました。

文芸サークルあかざ社は、希望のない青年の胸に明日の希望の灯をともそうと結成され、物資のない時代に回覧機関紙『あかざ』を発行しています。

開催期間　3月14日（火）～5月28日（日）
記念講演会　日時　4月15日（土）
講師　新井勝紘（国立歴史民俗博物館助教授）氏
解説書の発行　B5　20頁

戦前・戦中・戦後のくらしをふり返る

瑞穂町郷土資料館

瑞穂町にとっての戦後50年は、あの戦雲急を告げるといった緊迫の戦前と、勝つためと称してあらゆる苦難を乗り越えて頑張った戦中の、苦しかった生活が土台となっての歴史でした。よって、戦後50年というタイトルで特別展に取り組むわけにはいかなかったのです。

戦前は村から町への大飛躍の時だったと書くとひと言で終わってしまいます。けれども、その頃の生活を浮きぼりにできる資料があるのかと、くらし展を開催するのにはあまりに貧弱な考えしかありませんでした。ところが一つの目玉が見つかりました。それが町制施行を祝う行事の写真発見です。役場の前に作られた大アーチ。そこには祝町制・紀元二千六百年・瑞穂町と大書されています。また、町の青梅街道にも、これまた大アーチが建ち、奉祝の字が読めます。この２つのアーチの写真は未発表のものでした。また、町制の時、祝賀行事は数々行われた記憶はあるけれども、アーチを建てたことを、当時の役場職員の人々は覚えていませんでした。資料が事実と歴史を語るというのは、正にこのことではないでしょうか。写真資料の大切さ貴重さを今更ながら再確認した展示でした。資料館の役目も、資料館への町民参加もこのところにあって、これこそ原点だとつくづく思いました。

戦中では収蔵資料はもっとも豊富です。翼賛壮年団の旗など、もうどこにもないでしょう。それに、展示をする過程で、１人の将校の遺品が飾られたのです。小学校、青年学校の教師で、昭和13～15年にかけて中支に出征したその時の従軍手帳、故郷からの慰問の手紙数百点、等々です。遺族の寄贈された数々の品に、その先生の人柄が偲ばれ、戦前～戦後を通して人対人の交流と、平和の大切さ人命の尊さを資料から訴えれることを知りました。

戦後のくらしをどう展示するかについては、敗戦から立ち上がった町民の姿を資料によりその解説によって考え、見直していけるよう配慮しました。なお、従来展示したことのある資料も、展示の工夫と見学者へのアピールの仕方で生きてくることを再認識しました。

資料館の活動範囲は無限です。観客も四季折々遠く北海道、そして九州からと広域化しています。それだけ資料館への関心も深まったと言えます。

今後も町民に呼びかけて、町民のくらしの資料を更に収集したいと思います。

終戦50年と博物館事業

青梅市郷土博物館

当館では、市の戦後50周年記念事業の一環として、写真展「昭和10年代の青梅－青梅写友会のあゆみ－」（７月15日～９月30日）を開催いたしました。

写真展「昭和10年代の青梅－青梅写友会のあゆみ－」は、昭和10年代に撮影された青梅の風景と人々の写真を中心に展示したものですが、当初は、市内を撮影した大正時代から昭和20年頃までの写真を展示する予定でした。

ところが、平成６年秋、たましん歴史美術館において開催された写真展「多摩・昭和前期－写真芸術に挑んだ人々－」で、青梅を拠点に活動していたアマチュアの写真団体『青梅写友会』の存在を知って興味を抱き、少しずつ調べ始めるようになりました。

そして、平成７年の３月から４月にかけて、青梅写友会の創立者や関係者にお会いすることができ、写真資料の収集が一気に進みました。その中には、アルバムに貼られた写真の他に、ネガが数百枚という数量で発見されました。これらのネガの状態はほとんど良好で、展示に使用するため焼き付けるネガをどれにするか選ぶのには大変苦労しましたが、郷土の風景とそこに写っている人々の表情がわかるようなものを約50点選び、本展の中心として展示しました。また、当時、館長をなされていた宮崎廷氏にネガを焼き付けていただき、展示の準備としてだけでなく、予算的にもとても助かりました。

青梅写友会に関する資料を集めたコーナーには、写真の他、カメラや展覧会案内なども展示し、本展の副題として掲げた「青梅写友会のあゆみ」については、聞き取り調査によってまとめたものを解説パネルにして展示しました。

結果的には、展示する写真の年代が予定よりも新しくなってしまいましたが、写真に写っていた方々からの反響が意外と多く、とても身近な展示会になったようでした。

また、この写真展と時期を平行して、コーナー展示「戦時下のくらし」（７月１日～８月31日）も併せて開催いたしました。

『多摩のあゆみ』で「戦時下の多摩」を特集

たましん地域文化財団
（たましん歴史・美術館，御岳美術館）

1995年は終戦50年ということで、多摩各地の博物館や公民館などで、さまざまな展示・行事などが行われました。また、戦争に関連する各種の資料なども調査・研究が進み、戦争遺物の保存の動きもみられます。こうした資料の発見や新しい視点からの研究・運動は、戦中・戦後の再評価に繋がってゆくものでしょう。

このような動向のなかで、たましん地域文化財団で編集・発行している『多摩のあゆみ』でも、第79号（95年５月15日発行）で「戦時下の多摩」を特集に組み、７名の方に論文を執筆していただきました。以下、その内容を若干ご紹介したいと思います。

斎藤勉氏「昭和十年代の多摩」と小沢長治氏「多摩地区の空襲と戦災」では、戦争を遂行するにあたって当時の多摩が一大軍需基地・軍需工場地帯となっていく過程、そのために甚大な空襲の被害にあった様子が概観できます。小沢氏の各市町村史の空襲に関する記述の比較検討は、多摩地域全体のなかに各市町村を位置付けるのに有効な方法でしょう。

楢崎茂弥氏「十五年戦争と立川陸軍飛行場」、竹野功騎氏「『マ総司令部司令写』綴りに見る占領下学校の記録」、小作雅男氏「小さな手帳から～小笠原村母島で死んだ一兵卒～」では、丹念な聞き取り調査や未見の史料紹介によって、今まで知られていなかった事実が明らかにされています。

関島久雄氏「中島飛行機の大きな工場と小さな鉄道、そしてその後」と井藤鐵男氏「幻の鉄道が見えてきた～中島飛行機武蔵製作所の簡易鉄道～」は、今ではすっかり忘れられた軍用鉄道に関する掘り起こしの記録となっています。

江戸時代の古文書は資料として大切にされますが、現代に関するものはなおざりにされてきました。『ミュージアム多摩』でも「終戦50年と博物館事業」の原稿を募集しているとのことですが、各地で取り組まれた事業内容を収集し、検討することで、新しい事実が発見できるかもしれません。また、これが機会となって博物館のネットワークがますます強化されて、豊かな歴史像を市民に情報発信できることを期待しています。

戦後50年の年に

府中市郷土の森博物館

95年夏の猛暑の中、郷土の森の「水遊びの池」では連日子どもたちの歓声が谺し、特別展「世界の昆虫博」が大当たりして、夏休み８万人近い入園（館）者を迎えることができた。まずは「順調」な夏というべきだろうが、どこか寂しいと誰かが考えるだろうと思っていると、やはり、あるタウン誌に市民の声が掲載された。

「（郷土の森は）たしかに素晴らしいんです、けれども今年は戦後50年とあって各地でこれに因んだ催しが見られます。府中でも戦後50年にふさわしい行事をやってもらいたいと思いました。それから、博物館には近現代史専攻の職員がいないみたいですので、その点も考えてください」と。

この後半部分の意見は事実であるが、何もしなかった理由にはできない。市の他の部署の小さな＜平和＞展や他館の＜戦争＞展に当館資料を出品したということも弁解にはならない。要するに、このテーマで本欄を埋めるのは心苦しい。

しかし、この問題に関して当館としても何もしなかったわけではないことを述べておきたい。

郷土の森の移築復原建物の一つに旧府中尋常高等小学校があり、中では教科書を中心にした教育史の展示を行なっている。その一郭に＜国民学校の時代－戦時下の小学校＞のコーナーを設けた。資料の寄贈者は、昭和11年に本小学校に入学された方で、教科書のほかたくさんの作文、答案、習字、図画などを含んでおり、この間の学校教育の様子を生々しく伝えている。たとえば、作文＜兵たいさん＞＜聖戦五周年を迎える私達の覚悟＞＜真崎大将＞、習字＜戦争軍旗大砲＞＜日志子供同志＞＜八紘一宇＞などなど。

秋には同じ建物の教室で唱歌を歌う会を催した。今回は昔話の唱歌がテーマ。たとえば、＜桃太郎＞の歌は日露戦争直後に文部省唱歌として作られ、戦後は好戦的との理由で教科書から消えた。戦時中は＜征け桃太郎、米英を撃て＞というポスターまであったそうである。そんなことも考えながら足踏みオルガンに合わせてみんなで歌ってみたのである。

たかが戦争資料、されど戦争資料である。どんな迫力ある展示をしても実体験に及ぶはずもなく、どんな小さな一点でも個人にとって社会にとってその意味することは限りなく重い。

加盟館(園)の話題

東村山市立郷土館の閉館

東村山市立郷土館

前号でお知らせしましたように、東村山市では新しい博物館施設として「東村山ふるさと歴史館」を建設中です。それに伴って「東村山市立郷土館」は平成８年３月で閉館となります。

昭和40年に多摩地区で最初の博物館相当施設として産声をあげてからの30年間、新しい博物館がぞくぞくとできる中で「東村山市立郷土館」は、静かに地域の歴史を語ってきました。

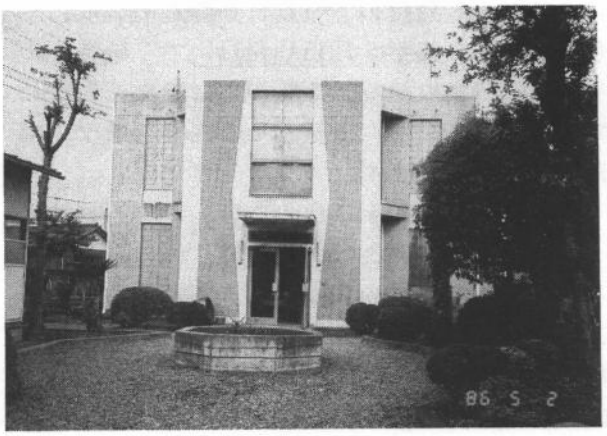
「郷土館」は、昭和39年に市内で最古の化成小学校の創立90周年の事業として市内外の同窓生・有志から募金を受け、建設されました。

その後、市へ移管され、「東村山市立郷土館」として昭和40年４月に開館しました。

郷土館の建設の趣旨である「同窓生の懐古の情の存続と化成小学校は勿論東村山市教育の発展をのぞみ、後世にまで役立つ東村山郷土館を建設する」は、市へ移管された後も生き続け、化成小学校同窓生の郷土への心の記念碑として、また、多くの子供たちの学習の場として慕われてきました。

しかし、変わりゆく時代に追いついて行くには、建物の狭さや老朽化等が障害になってきてしまいました。郷土館の建設の趣旨は新生する「東村山ふるさと歴史館」に受け継がれ、発展していってくれることでしょう。

ここで30年間の役目を終え、幕を降ろすことに致します。



江戸東京たてもの園の完成・整備について

江戸東京たてもの園

１．構想から開園に至るまで

江戸東京の文化を保存し、次代に継承していく都立博物館の建設が提言されたのは、1980年マイタウン構想懇談会においてである。以来、江戸東京博物館建設構想懇談会及び江戸東京博物館建設準備室の設置による事業化推進が行われた。その際、文化遺産としての建造物等を移築・保存するとともに、戸外でのレクリェーションのための野外施設併設が構想され、86年当該野外施設の小金井公園内設置を、89年には野外収蔵施設基本計画を決定するとともに、収蔵建造物の解体も始められた。90年の第三次長期計画では野外博物館の完成年度を2000年、収蔵建造物目標を35棟とし、92年野外博物館の名称を江戸東京たてもの園と決めた。墨田区にある本館と同時にたてもの園が開館したのは、93年3.28で、収蔵建造物13棟でのスタートである。

２．たてもの園の完成に向けて

収蔵建造物が予定の１／３強での開園ではあるが、ビジター・センター等の基本的な施設は完備しており、また高橋是清邸や看板建築、子宝湯、万世橋交番等の見応えのある建造物を、公開するとともに、豊富な資料とスタッフ、学芸員の充実により、かなり整備された施設としてオープンすることができた。開園３年目となる本年10月には、50万人目の入園者を迎えるとともに、17棟目となる旧自証院霊屋（都指定文化財）も公開された。現在三井邸、都知事公館、写真場、看板建築等に着手しており、平成12年の完成に向けた努力が着々と進行している。

とはいえ、完成途上のため町並みの再現が出来ていない、団体休憩所がない、園全体を解説した冊子の未完成等課題は多い。こうした施設の整備等は、財政状況厳しいおりではあるが、都民生活の文化的拠点となるという設置目的に沿って確実に進めていかねばならない。

３．たてもの園完成後における施設整備

平成12年の完成は、施設の整備の終了を意味しない。建造物の収蔵は完了したが、新たな整備のスタートと考える。その方向として①都民が参加、協力する博物館活動　②都民の多様なニーズに応えうる施設の内容及び資料の充実　③完成後も発生する保存が必要な建造物にかかる第二たてもの園構想　④建物文化についての調査･研究等を進めていく必要があると考えている。

繊維博物館の改修工事が完了して

東京農工大学附属繊維博物館

当繊維博物館は中央線東小金井駅から徒歩9分のところにあり、武蔵野の面影を残した自然いっぱいの中にあります。当館は1866年（明治19年）に農商務省「蚕病試験場」の陳列館として創設された非常に歴史ある博物館です。

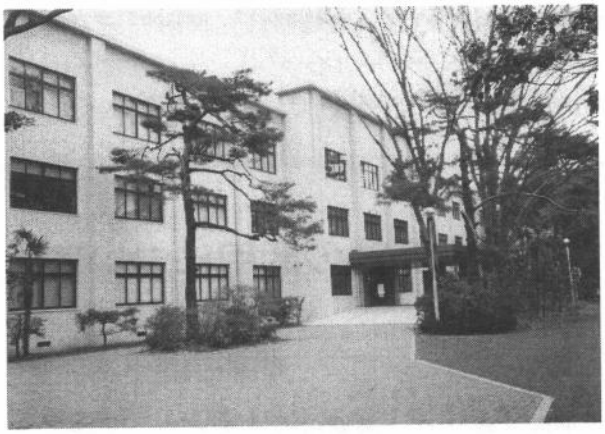
現在の建物は昭和12年建設された鉄筋コンクリート3階建のフロア面積3000㎡あり、昭和53年までは本学工学部本館として使用していてたものです。昭和54年に改修工事が行われ博物館展示室に直したものの、博物館利用としては充分でなく再度の大改修工事となりました。今回は政府の景気対策のひとつとして実施されたようで工事決定が急に決まり、外観や館庭の美化工事が中心に行われました。そのため見た目はほんとうにきれいな博物館に生まれ変わりました。

もうひとつ大きな工事目標として展示室内の美化工事です。当館の常設展示室は昔は教室であり、現在でも2年おきの特別展「科学技術展」などは全館が会場となるため固定の展示ケースはありません。資料がなければ約2000㎡の広大な広間だけです。しかし常設展示室にある資料の移動は館員主体でやらねばならず、移動作業は学生アルバイトを使ったものの3ヶ月におよび館員もへとへとに疲れる作業でした。

常設展示室については全般的に見直しがなされ2階3階大規模な資料の移動がありました。その移動は少なくとも2回以上せねばならず、移動により資料の破損や破棄がずいぶんとありましたが、この改修工事で全館の大きな展示品の交換がなされたことはメリットでした。おかげで資料がすっきりと並び見学者にとって見易くなったと思っています。

一方、特別展示室や企画展示室も大きな改修工事がなされ、スライディングウォール（移動壁）やライティングダクト（移動照明器具）が付設され、これからの展示作業にはずいぶん便利となりました。また今回の改修で2階には「浮世絵展示室」が新設されたのも大きな特徴です。エアコン付とライティング設備（照明が自動点滅）を持った特別室です。当博物館には「蚕織錦絵」という江戸時代の浮世絵が400点ありますが、今までは設備の関係で2年に1度ほどしか展示されませんでした。今後は常時「蚕織錦絵」が見られる展示室ができたことにより、年4回ほど展示替えしていく予定です。

残念なのは全館エアコン付きの建物改修がなされなかったことです。今どきエアコンのない博物館も珍しいことですが、まだ国立大学では普通のことであり殆どの教室にはクーラーもありません。そのため今後も8月の“夏休み”は当分続きそうです。



資料館の運営

檜原村郷土資料館

当館は、立地条件もあまりよくはないが観光客の利用が多く、近隣の市・町の人達、そのほか区部の人達・都外の県の来館者がある。

以前には、区・市内の小学校の副読本に村の様子がのっていて、多くの小学校より小学生の来館があった。

開館八年目をむかえ、展示写真類の入れ替えを今年実施した。ほかの展示物も、内容の充実をはかり展示強化が必要になっているが、高額の経費を要するため、今後の課題である。

年間の行事も、新思考を取り入れることを努力しているが、なかなかうまいことができずに悩んでいる現状です。

現在、地元の老人クラブの人達をお願いして二年程前から、手うちそば・うどんづくりの講習会を実施していて、なかなか好評にて、毎回三十名予定をオーバーして盛会です。

今後は、稗めし・麦めし（ばく飯、村の呼びかた）などの試食講習会の実施を検討中です。

また、山の仕事道具などの小学校や中学校に出前展示なども検討中です。

将来的には、色々な計画を必要とするが、まず経費の点、地の利の問題もあって困難である。

町田市立博物館の所蔵品について

町田市立博物館

町田市立博物館は郷土資料館として発足した経緯もあり、市内出土の考古資料や民俗資料が開館当初より収蔵されている。これは他の多摩地域の公立博物館と共通している点である。当館ではこのような郷土資料の他に、まとまったコレクションがいくつか収蔵されているので、これらについて紹介してみたい。まず美術工芸品としては、ガラス、陶磁器、時計などがある。ガラスは、チェコと中国を中心に、ヨーロッパ各国と日本、それに地中海沿岸より出土した古代ガラスなど655種、821点がある。特にチェコガラスは、16世紀～20世紀までの作品が131種275点にのぼり、質・量ともに日本最大のコレクションとして高い評価を得ている。また中国ガラスは18世紀～20世紀までの作品が135種147点、鼻煙壺と呼ばれる嗅ぎタバコ入れが324種324点あり、日本でも有数のコレクションの一つとして数えられている。陶磁器は、東南アジア陶磁（ベトナム、クメール、タイ、ミャンマー）と東洋陶磁(中国、朝鮮、日本、中近東)、それに明治印判手磁器のコレクションがある。東南アジアと東洋陶磁器で1,820点、明治印判手が1,387点。全部で3,207点を数える。東南アジア陶磁器は、インドシナ半島全域を網羅しており、体系的に見られるのが特徴と言える。中国陶磁は、貿易陶磁を中心に鑑賞性の高い作品群である。明治印判の磁器についても、公立館ではなかなか見ることのできない内容と作品数となっている。時計はそのほとんどが懐中時計で、スイス、フランス、イギリス、アメリカ、日本など18世紀～20世紀までの作品が104点、それにドイツ、フランス、アメリカの19世紀～20世紀の置時計が４点加わる。美術工芸品以外の資料としては、江戸時代に大津の街道でみやげ絵として売られた大津絵が46点ある。これは当館の小展示室（約30坪）に一回展示できるだけの点数を目標に収集してきた。また近世・近代の戯画、風刺画など約550点のコレクションもある。1995年９月12日～10月15日まで開催された「幕末の風刺画－戊辰戦争を中心に－」展では、子供絵27点、戊辰戦争の風刺画53点、幕末の風刺画17点の合計97点を紹介した。その他鯰絵、河鍋暁斎の「暁斎百鬼画談」、小林清親の「新版三十二相」、岡本一平他による「肉筆開国漫画六十年史図繪」などがある。

復元古民家の活用について

清瀬市郷土博物館

平成６年７月、清瀬市教育委員会では解体から約10年の歳月を経て、市指定有形文化財の古民家「旧森田家」を復元した。この古民家は、江戸時代中期末から後期前葉に建築されたとみられる武蔵野の典型的な本百姓の居宅で、約1200㎡の敷地に、母屋のほか、つるべ井戸、外便所、水屋を設け、庭もかなり広くとってある。設置場所は体育館や明治時代の古民家、神社などに隣接し、柳瀬川の向こうは所沢市という市の最北端にあり、閑静なたたずまいである。

教育委員会は見学施設としてだけでなく、市民の伝統的行事の体験学習の場として利用されることを期待している。

館では、伝承スタジオで行ってきた体験学習事業の一部を旧森田家で実施してみた。まゆ玉飾り、節分、わらぞうり作り、七夕飾り等。お節句にはこいのぼりをあげたり、鍾馗さまを飾ったりした。冷暖房完備ともいえず、薄暗い屋内である。参加者の方々から文句の一つもあるかと思いきや、案外と昔ながらの建物の雰囲気をなつかしんだり、楽しんでいるようである。確かに古民家でセミの声を聞きながら縄をなうなど、なかなかできない貴重な体験になったのではと手前味噌ながら思う。

さて、この古民家であるが、認知度が低いせいもあって市民主催の事業に利用されていることはほとんどない。実際、管理はシルバー人材センターに委託されており、市民の利用のたびに職員が出向くのも難しいので助かっているのが実情だ。

せっかくの施設でもったいない気もするが、しばらくは館の出張所的活用になりそうである。

十周年記念事業実施報告

羽村市郷土博物館

当博物館は昭和60年４月に開館し、今年十周年を迎えた。そこで、市民により親しんでもらうとともに、運営協力者に感謝の意を示すために、十周年記念事業を企画した。博物館が堰(せき)の桜に囲まれる時期でもあることから、「羽村の花　桜とともに－博物館はいま　10歳になりました」とし、４月１日から16日まで開催した。市民など団体の協力を得て実施することにより、市民への広がりをもてるようにした。結果は以下のとおりである。

また、開館十周年記念誌『成長する博物館をめざして』を発行し、開館までのあゆみ・平成９年度に予定している第二次展示工事の基本計画などを掲載した。

◇◇◇十周年記念事業実施結果◇◇◇

１．写真展「堰と玉川上水の桜」
　市民による、桜と玉川上水の写真を展示。
　期間中毎日開催・観覧者数　4,168人

２．「クイズに答えて絵はがきをもらおう」
　館内の展示についてのクイズをつくり、回答者に絵はがきを配布した。
　期間中毎日開催・回答者数　1,390人

３．「博物館の収蔵庫を探検してみよう」
　一般来館者を収蔵庫に案内した。
　９日間（１日２回）・参加者数 219人

４．「博物館の資料をコンピュータで探そう」
　収蔵資料検索システムの端末とマイクロリーダーを公開した。９日間・自由見学

５．「羽村の昔を体験しよう」
　お菓子づくりをした後、旧下田家住宅で昔話を楽しんでもらった。
　２日間（１日２回）・参加者数170人

６．「博物館の中庭で野点を楽しもう」
　博物館中庭で野点を行った。
　２日間・参加者数219人

７．「桜を撮影しよう」（撮影会・合評会）
　玉川上水の桜をテーマにした撮影会と合評会を行った。
　２日間・参加者数　延44人

８．「桜をアートしたら」
　桜のひこばえを使ってキーホルダーなどの工作が出来るようにした。（金具代のみ実費で徴集）また、彫刻家による桜の彫刻を展示した。
　２日間・参加者数　48人

写真集『五日市の百年』の発行と写真資料カードの整理・活用

あきる野市五日市郷土館

五日市郷土館では、平成７年８月に写真集『五日市の百年』を発行した。長期計画では、平成８年度の事業として行う予定であったが、今年度が五日市町合併40周年にあたるため、記念事業の一つとして繰り上げての実施となった。

以前から五日市郷土館では貴重な写真や古い写真の収集に心掛けてきた。寄贈された写真や借用したアルバムから複写した写真をネガアルバムに収め、キャビネ判にプリントして写真資料カードに整理する作業を行ってきた。

五日市は古い歴史を持った町である。しかも、市で栄えた町であるため、林業家や商家など経済的にも恵まれ、文化にも関心を持った家庭が多く、貴重な写真がたくさん残されていた。特に近年の住宅改造、都道拡幅のための立ち退きに対しても、貴重な写真の紛失を憂えた町の有志の方々によってよく保存されており、古写真の収集には多くの援助をいただいてきた。

写真集編集の取組みは、まず、広報によって、明治・大正・昭和の風景、仕事、祭り、行事、冠婚葬祭、学校、子ども、人々のくらし、風俗、交通、災害等の写真提供を求めた。また、情報を頼りに個人宅を訪ねて協力を依頼した。郷土館に届けて下さる方も少なくなかったが、情報を頼りに個人の家を訪問して収集した写真の量の方が多く、収集した写真は約3000点に及んでいる。これらの写真のすべてを複写してネガアルバムに収め、プリントして写真資料カードに貼付し、掲載写真の選択を行った。写真集の編集作業は５名の編集委員を委嘱して進めた。編集委員会は、住民の素顔やくらしの分かる写真集をめざしたが、この点では、古くからの写真愛好家の作品が大きな役割を果たしている。

写真集のために収集した写真の資料カードは、写真集の編集項目に合わせて、風景、街道・町並み、橋、観光、行事、祭り、産業、交通、教育、子ども、風俗、戦争、官公庁・企業、寺社、災害、その他の項目別にファイルにまとめ、現在、撮影地点・撮影年月日・所有者などのデータを整理中である。以前より写真資料については出版社や各種団体、個人を含め借用の依頼が多い。また、個人情報や著作権の問題から貸し出し出来ない資料もあるため、対応に苦慮してきた。今後はコンピュータの導入を含め、円滑な資料・情報の提供を図りたいと考えている。

利用者増への取り組み

東京都高尾自然科学博物館

当館は高尾山の麓に位置している。高尾山を背景に奥多摩に至る山々と、多摩川を中心とする東京の自然を対象として、地学、植物、動物、の自然史に関する資料を収集し展示し、研究している。展示資料は1800点程度で規模が小さいので集客力も弱い。入館者数は平成４年度９万７千人をピークに平成６年度は６万７千人に減少している。減少理由として特記すべきものはみあたらない。むしろピーク時を除くと６～７万人台であるので、平年の入館者数に戻ったともいえよう。しかし、「明治の森高尾国定公園」の入場者が184万人へと増加しているにも拘らず当館への入館者が減少しているのはなんとしても気になるところである。

館を刷新して内容に魅力をもたせ、館独自の集客力の向上に勤める必要がある。

そこで、先ず第一に、展示内容の刷新を図ることにして、予算をつけて植物、動物の調査を促進し、ジオラマや標本等の充実、更新を進めることにした。

第二に、当館が従来行なっていなかった企画展を行なうことにした。これまでは、自然観察会や講座に力点をおいてきたので、企画展まではなかなか手がまわらなかったが、今回は企画展を大きな柱として位置付けることにした。「東京のクマー知られざる生態の謎を探るー」と題して、第１回はコーナー展示程度の規模だが平成９年に開催できることになった。その後も毎年企画展を続けるつもりでいるので、序々に本格化させることにしている。

第三に、開館時間の延長である。通年開館は昭和61年度から実施しているが、開館時間は９時から４時までとなっていた。これを、本年８月25日から５時までに延長した。この１時間延長によって、入館者は13％増加している。

２年前の入館者調査をみても「ハイキングのついで」56％、「観光のついで」23％が圧倒的に多く、その帰りに立寄るとなると時間延長は実体に即した対応であったと考えている。

この外に、内装改修、照明方法の改善を行い好評を得ている。本年度は外装改修を行う。

観察会や講座の利用者は増加傾向にあるので入館者対策だけを述べた。広く都民の利用に供するには、職員の努力と工夫が必要である。

入館者増への企画展の試み

小金井市文化財センター

当館は平成５年６月の開館から３年目になりますが、来館者は年間4500人程度と横這いで、他の社会教育施設に比べ利用者が少ないことは否めません。その理由としては、交通が不便なこと、ＰＲ不足で市民に存在が知られていないことなどが考えられます。そこで魅力のある事業によって少しでも利用者を増加させようと、昨年度から企画展を始めました。その一つが「小金井桜展」です。玉川上水の小金井堤は江戸時代から桜の名所として知られ、多くの文人等が訪れ、紀行文や、錦絵等多くの資料が残されています。また数年来、小金井桜関係資料の収集・整理を進めており、そうした成果をふまえながら、花見時の４月上旬に館蔵品を中心に企画を開催したところ、多くの入館者があり、好評を得て今年度も開催しました。この企画は当館の季節展として定着させ、視点を変えたり展示品を充実させながら毎年実施する予定です。会期中に新たな資料の寄贈や寄託、情報の提供があることも企画展の一つの成果といえます。

その他の企画としては、当館が舞台として登場する『次郎物語』の作者を紹介した「下村湖人展」を開催し、他市からの来館者も多く見られました。また、11月の文化財保護強調週間にちなみ、身近な地域の歴史や文化財を再発見しようという趣旨で企画展「貫井村のくらしと文化財」を開催し、同時に館外の広場で郷土芸能発表を同時開催しました。旧村を単位とした地域展示は今後も継続していく予定です。

いずれの企画も文化財保護行政のかたわらの手作り展示ですが、今後は隣接する公民館や小学校とも連携をはかりながら市民や児童が気軽に参加できる企画展や体験学習等も計画していきたいと考えています。また市内にある江戸東京建物園や農工大繊維博物館などとの連携も今後の課題です。

なお、当館は市指定文化財である建物を保存しながら資料館として活用を図っている施設であり、博物館としての機能を発揮するには、様々な制約がありますが、当面、基礎的資料の収集や整理を中心としながら、魅力ある企画展示や事業を工夫し、市民の理解を得て、将来の本格的市立博物館建設に向けた準備体制を整えていきたいと考えております。

事業報告

奥多摩郷土資料館

＊収蔵品展（２階）

６年４月～７年３月

●奥多摩湖の湖底に沈んだ、小河内の山村生活用具（国指定）を中心に展示。

●湖底に沈んだ旧小河内村の主な集落の写真展示。

●奥多摩に現在も存在する草葺屋根の民家模型展示。

●奥多摩で見られる蝶の標本・写真を展示。

●奥多摩の山岳地帯に生息している主な動物・鳥類の剝製展示。

●奥多摩に伝わっている昔話をテープ録音により聞いてもらう民話コーナー。

７年１月13日～31日

●正月飾りの門棒、まゆ玉飾り。

＊小河内の郷土芸能（１階）

６年４月～７年３月

●湖底に沈んだ小河内地域に伝承されていた国指定重要無形民俗文化財の鹿島踊り、東京都指定無形民俗文化財の車人形、獅子舞、神楽を展示（毎年９月15日に小河内神社と各地域で公開されている）。

●東京都指定有形民俗文化財の川井八雲神社の舞台、小丹波熊の神社の舞台、奥多摩湖上流の太子堂の回り舞台等の写真展示。

６年４月～７年３月

●奥多摩の14地域に伝承されている「ささら獅子舞」の中から奥多摩湖底に沈んだ原地域現在でも９月15日の小河内神社例祭に奉納されている原の獅子舞を展示（１階中央展示室）。

※　郷土資料館の庭には、花木がたくさん植えてあり、四季折々に彩りを添え訪れ人を楽しませてくれている。

ここ奥多摩郷土資料館の庭には、小河内ダムの湖底となる前に移された碑や石仏がたくさんあり、往時のようすが伺える。

平成７年度事業実績について

東京都井の頭自然文化園

当園では、利用者増への取り組みとして、様々な催しを実施いたしました。その一部をご紹介いたします。

■ニホンリス・ウォッチング

４月22日（土）　参加20人

当園では、「むさしのの森にニホンリスを呼び戻そう」をテーマに、園内でのニホンリスの放し飼いを目指す「リスの森構想」を推進しています。この催しではリスの観察や接し方の指導を通じて、構想の普及をはかりました。

■ヒツジの毛刈り（写真）

５月７日（日）　参加450人

１年に１度実施するヒツジの毛刈りを来園者に公開しました。普段見られない飼育業務を紹介するとともに、刈った毛をプレゼント。大好評でした。

■立体展示「カラスの生態」

５月30日（火）～　常設展示

「街のカラス・ウォッチング」をテーマに都会のカラスの生態やつきあいかたをパネルや模型で展示。身近な環境や問題をテーマにした展示です。

■講演会「彫刻のできるまで～制作現場から」

６月８日（日）　参加50人

彫刻家柳澤飛鳥氏に、彫刻制作工程について具体的かつ熱心に解説していただき、聴講の皆さんには彫刻への理解をおおいに深めていただきました。

■秋の展示「お月見」

９月３日～10月４日　企画展示

当園のシルバーガイド（高齢者ボランティア）さんに企画から制作までをお願いして季節の展示をしていただきました。なおそのスペースは、当園の歳時記的役割を果たしています。

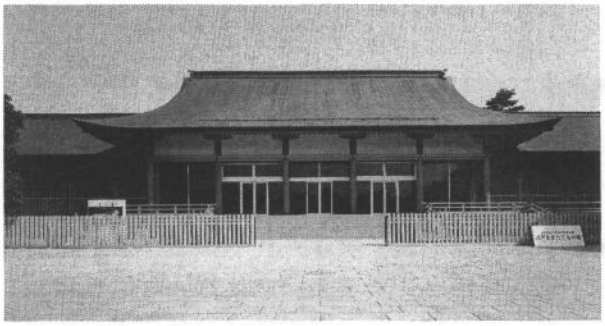
■絶滅のおそれのある日本の動物

10月15日（日）　参加延べ100人

ＷＷＦからインストラクターを招いて、絶滅が危惧される日本の動物について、ビンゴゲームを通じて楽しくまなぶイベント。大きなお絵描きスペースが子供たちに大人気でした。

新加入館紹介１

江戸東京たてもの園



江戸東京たてもの園は、江戸東京の歴史的・文化的価値のある建物で現地保存が不可能な場合、これを収蔵・展示し、次代に継承する目的で設置された野外博物館。都立小金井公園に平成５年３月東京都江戸東京博物館の分館としてオープンした。復元建造物の内部で生活民俗資料の展示を行うとともに、町並みを再現し優れた建築文化と変遷する東京の生活文化の理解に役立てる展示を行う。約７haの園内をセンター・東・西の三ゾーンに区分し、整備をすすめており現在17棟を公開している。平成12年の完成時には35棟が立ち並ぶ予定。また、旧武蔵野郷土館の資料を引き継ぐ考古・民俗資料等の常設展示を行っている。

※主な収蔵たてものの概要※

♧**ビジターセンター（旧光華殿）**　紀元2600年を記念して皇居前に建てられ、翌昭和16年に移築。寝殿造を模したここは正面出入口。

♧**高橋是清邸**　総桧普請の２階の寝室は2.26事件現場。１階の座敷に喫茶室。

♧**西川家別邸**　製糸会社を営んだ伊佐衛門が檜、桂等の良材を使用して接客用に建築。

♧**旧自証院霊屋**　都指定文化財で豪華絢爛な様式の家光の娘が母を祀った霊廟。

♡**万世橋交番**　明治の八角形の瀟洒なレンガ造り。神田からトレーラーで運んだもの。

♡**子宝湯**　東京の銭湯を代表する形式をもつ銭湯。坪庭やタイル絵も再現している。

♡**武居三省堂**　建物前面がタイル貼りの看板建築。壁面に筆等の桐箱が並ぶ文具店。

♤**八王子千人同心組頭の家**　江戸末期の千人同心組頭の家を推定して復元した建物。

♤**吉野家**　江戸期に名主の役宅として使われた建物。昭和30年代の農家の生活を再現。

♤**田園調布の家**　大正14年大田区田園調布に建てられた居間中心型の洋風住宅。

※展示その他の活動内容※

★**ビジターセンターパネル展示**　パネルと映像により、江戸東京の歴史を建物や都市計画の面から示し導入展示としている。43インチのマルチビジョンがあり、山の手と下町に関するビデオ等の映像を楽しめる。

★**図書・映像コーナー**　歴史や建築、博物館に関する図書及び復元建造物の紹介を行う映像ソフト等があり、無料で利用できる。

★**常設展示と特別展**　展示室では、旧武蔵野郷土館の資料により原始・古代から近世に至る武蔵野を中心とした歴史を紹介する。また江戸東京の建築文化や多摩地域の歴史に関する特別展示を年に一回一定期期間実施している。

★**屋外展示**　古代の住居跡、石樋、灯篭、道標等を多数展示している。

★**ワークショップ及び普及事業**　たてもの園により親しんでもらうために、園資料や環境を活かした、体験学習や催し物、講座・講演の実施等の事業を行っている。

※来園のご案内※

〔所在地〕〒184 小金井市桜町3-7-1（小金井公園内）☎0423(88)3300　FAX 0423(88)1711

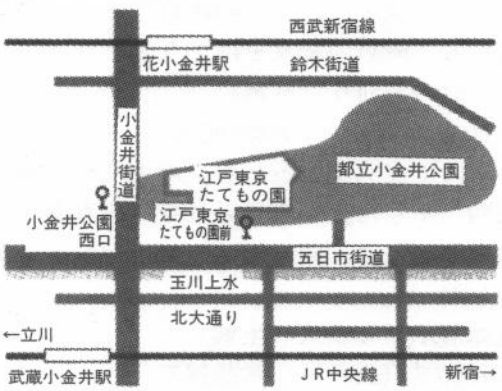
〔開園時間〕４月～９月：９時30分～17時30分
10月～３月：９時30分～16時30分

〔休園日〕毎週月曜日（祝日・振替休日の時その翌日）年末年始（12月28日～１月４日）

〔入園料〕※小学生未満及び65歳以上無料

◆個人	一　　般	300円
	小・中・高	150円
◆団体（20名以上）	一　　般	240円
	小・中・高	120円

〔交通のご案内〕



●ＪＲ中央線武蔵小金井駅からバス７分

●西武新宿線花小金井駅からバス５分

新加入館紹介2

たましん歴史・美術館，御岳美術館

（財団法人たましん地域文化財団）

財団法人たましん地域文化財団の事業

財団法人たましん地域文化財団は、多摩中央信用金庫多摩文化資料室を母体として、同金庫により設立された財団で、1991年に東京都教育委員会より認可を受けました。現在「たましん歴史・美術館」、「歴史資料室」、「御岳美術館」の管理、運営を行っています。

多摩中央信用金庫は、信用金庫のもつ特質である地域密着主義を基盤とする「地域住民のために」という理念の下に、多摩地域の歴史資料と美術作品の収集を行ってまいりましたが、折からの「地方の時代」といわれ自らの生活地域を見直そうとする気運にも助けられ、市町村の枠組みを越えた資料の蓄積が得られています。

そして82年にはたましん国立支店5階に同資料室を移し、歴史資料を公開するとともに、6階に「たましん美術サロン」を開設し、たましん所蔵の美術作品展を行ってまいりました。こうした永年の活動を基礎として、多摩地域の独自性をいかした新しい地域文化の形成に向けて一信用金庫のサービス業務を離れ、地域の文化資料の調査・研究、情報の提供、資料の公開を通じて、更なる地域文化への貢献を念願して、財団法人たましん地域文化財団が設立されたものです。

たましん歴史・美術館では、主に地域の代表作家を取上げる年一回の特別企画展をはじめ地域に関連した歴史資料展示、またたましん所蔵作品の中から絵画、古陶磁、浮世絵、写真など年4～5回の企画展を行っています。

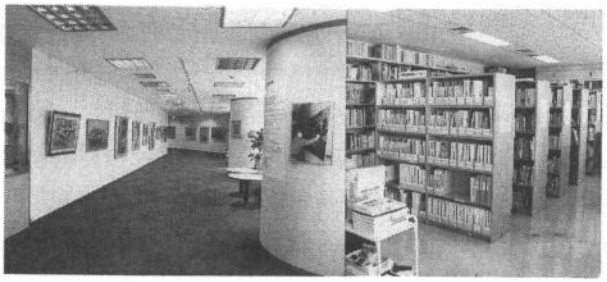
御岳美術館は、たましん歴史・美術館分館として93年に青梅市御岳に開館しました。

多摩川の上流に面した景勝の地にあり、明治・大正・昭和初期にいたる絵画・彫刻などの日本の近代美術と、多摩地域の作家の絵画・彫刻・工芸作品を展示しています。

歴史資料室では、多摩地域の郷土雑誌、書籍写真、地図などを収集、整理し、公開していますので地域に関する情報を概観することができます。この資料公開に加えて、出版事業として季刊の郷土誌『多摩のあゆみ』の編集をはじめ歴史研究の発掘を目的とした「多摩郷土文庫」や「多摩歴史叢書」を刊行しています。

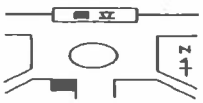
たましん歴史・美術館

開館時間　午前10時～午後6時
（入館は5時半まで）
休館日　月曜日、年末年始、展示替期間
入館料　無料～300円



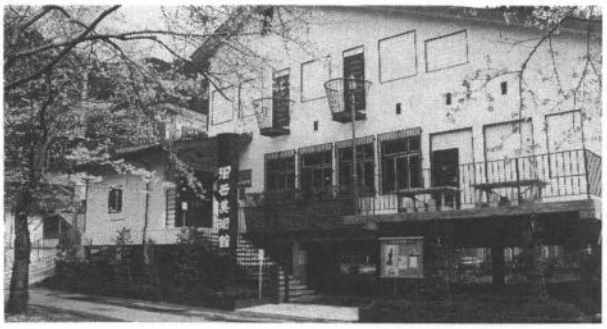
展示風景　　歴史資料室

建物の概要
構　造／鉄筋コンクリート造
（多摩中央信用金庫国立支店ビル5,6F）
歴史資料室（5階）　展　示　室（6階）
延床面積／106㎡　延床面積／390㎡
〒186 東京都国立市中1-9-52
TEL0425-74-1360（JR国立駅南口前たましん国立支店5.6F）



たましん歴史・美術館分館　御岳美術館

開館時間　午前10時～午後4時半（但し11月～3月は4時まで）
休館日　月曜日、年末年始、展示替期間
入館料　一般300円、高・大生200円、小・中生150円、20名以上は団体割引有



建物の概要
構　造／1階鉄筋コンクリート造
2.3階木造防火構造　3階建
敷地面積／491.99㎡、延床面積／457.52㎡
ご案内図

〒190-01　東京都青梅市御岳本町1-1
TEL0428-78-8814（JR青梅線御岳駅下車、徒歩18分）

三多摩公立博物館協議会の活動（平成７年４月～12月）

定期総会　平成７年４月21日（金）　会場：府中市郷土の森博物館
内容：議　　事：平成６年度東京都三多摩公立博物館協議会事業報告について
平成６年度東京都三多摩公立博物館協議会歳入歳出決算について
平成７年度東京都三多摩公立博物館協議会役員及び機関紙委員の改選について
新会員（準会員）の加入について
平成７年度東京都三多摩公立博物館協議会事業計画（案）について
平成７年度東京都三多摩公立博物館協議会歳入歳出予算について
講 演 会：「三博協のあゆみ」　講師：朝倉雅彦氏

第１回協議会　平成７年７月21日（金）　会場：江戸東京たてもの園
内容：情報交換：平成６年度会員館の利用状況について（報告）
展覧会図録の作成について
美術梱包業者の決定方法について
施設見学：江戸東京たてもの園

第２回協議会　平成７年11月15日（水）　会場：丹縄自治会館（青梅市）
内容：情報交換：会員各館の平成８年度事業計画について
施設見学：たましん御岳美術館、せせらぎの里美術館、玉堂美術館

東京都三多摩公立博物館協議会役員および機関紙編集委員（予定）

	会　長	副会長	監　査	編集委員
平成７年度	町田市	武蔵村山市	青梅市 あきる野市	清瀬市・立川市 檜原村・日野市
平成８年度	青梅市	あきる野市	調布市 羽村市	小金井市・国立市 東大和市・東村山市
平成９年度	調布市	羽村市	小金井市 国立市	八王子市・府中市 町田市・青梅市

編集後記

平成７年には各地で「終戦50年」に関連した行事が行われ、一種のブームの様相を呈していた。本号もちゃっかりとそのブームにあやかり、「終戦50年と博物館事業」を特集テーマとして設定した次第である。ただし、このテーマの設定に際して編集委員が意図したところは冒頭に記した通りであり、徒らにブームに便乗したのではないことをご理解いただきたい。

マスコミを中心にあれほど耳にした「終戦50年」という言葉も、８月15日を過ぎるとぱたりと鳴り止んでしまった観がある。しかしブームが去った今こそが、未曾有の戦争体験とその後の50年間を腰を据えて見つめ直す時期であるとも言える。博物館においても、この「節目の年」に得た経験を改めて問い直し、これからの博物館の在り方を探って行くことが、今求められているのではないだろうか。

ミュージアム多摩　No.17
発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長　町田市立博物館館長　田邊三郎助
〒194 町田市本町田3562
☎ 0427-26-1531
編集委員：清瀬市郷土博物館（松村和子）
立川市歴史民俗資料館（柏倉　登）
檜原村郷土資料館（市川徳寿）
日野市ふるさと博物館（金野啓史）